

意識の倫理学の最前線：

ジョナサン・バーチ『有感性の辺縁』を巡る諸問題の検討

竹下昌志 (Masashi Takeshita)¹ 鈴木大地 (Daichi Suzuki)²

篠崎大河 (Taiga Shinozaki)³ 太田紘史 (Koji Ota)²

¹名古屋大学・²筑波大学・³慶應義塾大学

意識に関する神経科学的・哲学的研究が急速に進み、我々がこれまで意識がないと思っていた存在が、実は意識を持っている可能性が現実的となってきた。例えば、2024年に提出された『動物意識に関するニューヨーク宣言』では、総勢 500 名を超える科学者・哲学者が哺乳類や鳥類だけでなく、すべての脊椎動物と多くの無脊椎動物が意識を持つ現実的な可能性があることに同意している。また近年の科学技術の発展により、脳オルガノイドといった通常の生物個体ではない存在の意識の可能性についても無視できなくなりつつある。もしそうであれば、意識があるかどうか不明確な存在に対し、私たちは何をすべきなのか。

こうした背景の中、英国の哲学者ジョナサン・バーチは『有感性の辺縁』(The Edge of Sentience: Risk and Precaution in Humans, Other Animals, and AI) を 2024 年に出版し、予防的アプローチの観点から、意識の可能性がある存在に対する倫理的議論を展開している。バーチは、十脚類や頭足類などの動物の意識に関する証拠を総説し、英国政府に対し動物意識・動物福祉政策について提言するなど、学術的にも政治的にも非常に影響力をもった研究者である。バーチの本書は、そうしたバーチの活動を総括するものであり、意識の倫理学の最前線を概観することができる。そこで、本ワークショップでは、ジョナサン・バーチの本書の検討を通じて、意識の倫理学の最前線を巡って検討する。

本ワークショップではまず、竹下から企画趣旨の説明を行った後、鈴木および篠崎からそれぞれ、意識の理論・意識の哲学についての議論、特に動物意識についての議論について説明し、バーチの意識の理論に関して批判的な検討を行う。次に太田から、オルガノイドの道徳的地位に関する人々の態度について、実験哲学的なアプローチからの研究を報告する。最後に竹下は、有感性の有無について不確実な存在に対してバーチが採用する熟議民主主義的アプローチを批判的に検討する。

Birch, J. (2024). *The edge of sentience: risk and precaution in humans, other animals, and AI* (p. 398). Oxford University Press.